

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 30 日現在

機関番号：32688

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730868

研究課題名(和文) 発達障害児をもつ親の幸福感を支える遊びのプログラムとアセスメントツールの開発

研究課題名(英文) Development of play programs and assessment tools for the well-being of the parents with children with developmental disabilities.

研究代表者

大橋 さつき(Ohashi, Satsuki)

和光大学・現代人間学部・准教授

研究者番号：60313392

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、発達障害児をもつ母親の幸福感を支える遊び活動に関する実践研究である。本研究の結果、ムーブメントプログラムを通して、母親が子どもを肯定的に承認し、子どもと無理なく関わるための手がかりを得ていることがわかった。楽しい体験を共有することで母子関係に好循環が生じていることが明らかになった。さらに、発達障害児支援におけるムーブメント教育の有効性が確認され、モデルプログラムが提示された。

研究成果の概要(英文)：This study is a practice research on play activities that support the well-being of mothers with children with developmental disabilities.

The results of this study shows, through the Movement Education programs, that mothers will be able to accept their children positively, and also will be able to find a clue to naturally engage with their children. By sharing enjoyable experiences the positive cycle starts in the mother-child relationship. Furthermore, the effectiveness of the Movement Education in supporting children with developmental disabilities is confirmed, and the model program has been presented.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：発達障害児 親支援 遊び 幸福感 ムーブメント教育・療法

1. 研究開始当初の背景

発達障害児の支援においては、親の子育て充足感や家族全体の QOL を高める活動が必須であると考えられ、家族参加型の活動や親に対する支援、家庭の基盤となる地域への支援について、その必要性が叫ばれている。発達障害児に対してライフスタイル全般にわたる切れ目のない支援を行っていくために、適切な環境を整え有効な働きかけをする最大の存在は家族であり、特に、主たる養育者である母親が抱える困り感やストレスは家族の生活そのものに大きな影響を与えるため、子どもの障害をめぐる母親の認識を正確にとらえつつ、母親自身の主観的幸福感、自己成長感、社会的活動の積極性を高める支援が必要である。

一方、遊びを原点とする発達支援法である「ムーブメント教育」では、元来より、親子・家族で参加できる集団遊びをベースにすることで「子どもの発達と共に、家庭機能をも促進していく」という考え方が根底にあり、そのための方法論が充実している。楽しく受容的な遊びの場の体験を通して、家庭での遊びのメニューが豊富になり家族で楽しむ機会が増えたり、親自身にポジティブな変容が生まれたりして、親の QOL の向上や子育て充足感の増加につながり、親の変化が子どもの発達にも影響を与えると報告されている。さらに、集団遊び場面での親同士のつながりが自然で無理のない相互支援に発展し、ピアサポートとして機能していることや障害受容へのステップとなっていることもうかがえる。

2. 研究の目的

本研究においては、ムーブメント教育による遊び活動において、母親が「楽しかった」「嬉しかった」「よかった」など肯定的な感情を抱いたときにはどのような事象が起きていたのか、活動を通して母親が持つ幸福感にはどのような特色があるのか、明らかにすることを目的とする。

さらに、その結果をもとに、発達障害児をもつ親支援のための遊びのプログラムとプログラム実施に役立つアセスメントツールを具体的に提示することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 対象

研究代表者自身がリーダーまたは監修として携ったムーブメント教育による集団プログラムのうち、2002 年から 2011 年までの期間に、大学や地域の児童館型施設、保育所、特別支援校等で実施された 63 回の記録を対象とする。実施の規模は様々であるが、どの活動も親子（家族）での参加を原則としてお

り、各回に自閉症スペクトラム児や ADHD などの発達障害児やその傾向がある子どもたちが含まれている。

(2) 方法

【方法】コミュニケーション・シート（自由記述式の質問紙）に残された親自身による記述を対象に、その内容を一場面ごとに切片化し、KJ 法による分析を行い、それぞれの意味単位に対して説明する概念を付与した。さらに、それらの概念の類似性に従い分類して共通性からカテゴリーを形成した。抽象度を増すために同様の作業を繰り返し、最終的にコアカテゴリーとして内容の主題を命名し、その出現比率を算出した。2 名（研究代表者とムーブメント教育指導者資格保有者で対象となる実践に携った者）が別々に判断したものを合わせるにより、分類の結果の正当性を追求した。また、それらと参与観察、映像による記録とを照らし合わせて事例の詳細把握の補足資料とした。

【方法】対象の発達障害児のうち、特に自閉症スペクトラム児（以下 ASD 児）4 名（開始時 5~7 歳、アスペルガー障害 1 名含）について、「他者（母親、支援者、他児）とのやりとり」が見られる場面について、「インリアル・アプローチ」（竹田契一監修、里美恵子・河内清美・岩井喜代香（2005）「実践インリアル・アプローチ事例集 - 豊かなコミュニケーションのために」、日本文化科学社。）を参照し、以下のカテゴリーで分析を行った。

X：相互作用不成立状態	
X-1	【平行】子どもから他者への働きかけは明白ではなく、相手の反応もなくお互いが平行してかわりなく個人の行動をとる場合。
X-2	【無視】一方から他方へ働きかけは明白であるが、それに対する相手の反応が生起しない場合。無視、無反応。
X-3	【拒否】一方から他方へ働きかけは明白であるが、それに対してかわりを避け、拒否、拒絶を示す場合。
Y：相互作用しかけの状態	
Y-1	【意図的反応】一方から他方への働きかけは明白ではないが、相手が意図づけをして発展させようと反応する場合。
Y-2	【伝達意図的開始の反応】一方から他方への働きかけが明白で、それに対する相手の反応が生起する場合。
Z：相互作用成立状態	
Z-1	【同時開始・共振】やりとりの起こりが分らず、どちらからともなく二者間または集団で情動的な交流をしている場合。
Z-2	【みかけ開始で生起の連鎖】一方から他方への働きかけは明白ではないが、相手が意図的に反応したことによって相互作用が 1 ターン以上続く場合。
Z-3	【伝達意図的開始で生起の連鎖】一方から他方への働きかけが明白で、それに対する相手の反応が生起し、相互作用が 1 ターン以上続く場合。

対象児 4 名が継続的に参加した 2006 年 10

月から 2010 年 1 月までに実施した教室のうち映像記録に不備がない回の計 28 回を対象に、トランスクリプトを作成した。作成にあたっては、対象児別に作成し、他者には、母親の他、支援者（リーダー、ボランティア学生）、他児が含まれ、記号により整理し、分類した。第 1～7 回を 期、8～14 回を 期、15～21 回を 期、23～28 を 期として分けて、行動数全体における、X：相互作用不成立状態、Z：相互作用しかけの状態、Y：相互作用成立状態の比率を計算した。特に Y の場面について詳しい分析を行った。

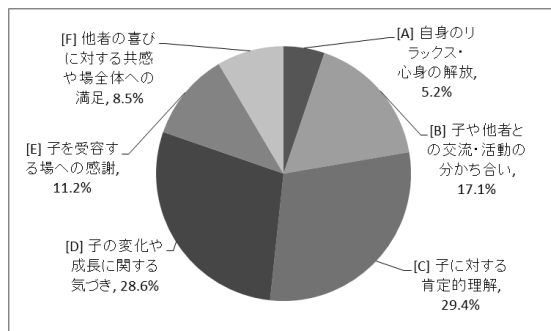
(3) 倫理的配慮等

対象となる実践の参加者には、事前に、研究の主旨や方法、個人情報保護、同意の撤回に関する事項を文書にて説明し、同意を得た。また、データ分析の作業においては、コード化し個人を特定できないように配慮して用いた。

4. 研究成果

(1) 発達障がい児をもつ母親の幸福感を支える遊び活動の特徴について

【方法】により、活動後の自由記述について、母親の幸福感を表していると判断される肯定的な表現の 987 例のデータを抽出し分類した。その結果、「A:自身のリラックス・心身の解放(5.2%)」、「B:子や他者との交流・活動の分かち合い(17.1%)」、「C:子に対する肯定的理解(29.4%)」、「D:子の変化や成長に関する気づき(28.6%)」、「E:子を受容する場への感謝(11.2%)」、「F:他者の喜びに対する共感や場全体への満足(8.5%)」の 6 つのカテゴリーが形成された。



分析結果を受け、子どものありのままの姿や変化を肯定的にとらえることができる場面が母親の幸福感に最も強く関係していることが解った。このことは、ムーブメント活動において、子どものストレンクス（好きなことや得意なこと）を活かしながら、個々の発達段階に適應したスモールステップの課題設定をすることで、肯定的なことばげや承認の場面を重視していることに起因していると考えられる。また、自身が遊びの場に身を委ねリラックスしたり、子どもや他者と交流したりすることにも喜びを感じている。

このことは、受容的で安全な遊びの場が母親自身の安心感や解放感を高め、特に、ふれあい遊びやダンスムーブメントの活動によって母子間の情動的な交流の機会を多く提供し愛着関係の深まりを生んだと考えられる。また、遊具の活用法やイメージ、集団遊びの流れを共有することにより、他者との共に体験し共に感じる場面を豊富に備えていることに関係している。すなわち、母親がムーブメント教育による遊び活動に参加する子どもの姿から、その特徴や発達について肯定的な承認や気づきを得て、さらに、他者と子どもの関係から、自身が子にかかわるための手がかりを自然に身につけていくと考えられる。遊びの中で子どもの行動を冷静に観察して子どもへの肯定的注目を強化することで、「子どもを肯定的に受け止め、共に楽しい体験を共有することができた」という実感が子どもへ愛情を深め自信を回復する第一歩となったと考えられる。また、母親自身が主体的に遊びに参加し、その体験を共有することを通して自身の気持ちが子どもと重なり、子どもの気持ちや表現の理解が深まり、他者や遊びの場全体への感謝や場づくりを担う一員としての積極的な姿勢にもつながっており、好循環が生じていることが推察された。

(2) 遊び活動における母子関係の変化 - 自閉症スペクトラム児の他者とのやりとりに着目した分析から -

【方法】による分析からは、次の点があきらかになった。

全ての対象児において、開始率反応率共に、期から期に向けて、X の比率が減り、Y、Z が増える傾向が確認された。また、母親にも同様の傾向が見られた。

Z の相互作用成立状態の場面の特徴としては以下の 5 つに分類された。

ア．情動交流：母子間のふれあい遊びやダンスなどの「溶け合う」ようなかわりの場面や即興的な展開の中で集団の一体感が増したり盛り上がりたりする場面に見られた。

イ．模倣：完全な動きの模倣だけでなく動きの「質」への模倣も相互作用成立のきっかけとなる場合が多く見られた。

ウ．遊具の共有：遊具には、物体としての「永続性」があり、かつムーブメント遊具は可変性が高い。遊具を媒介にすることで、かわりに継続性と多様性が増していた。

エ．場の共有：「動きのタイミングを合わせる」、「合図を理解する」といった小さな共有から、ストーリー性のある展開において目的を共有したり役割を交替したりする様子が見られた。大人だけでなく他児と助け合う姿もあり、遊びの場を共有することで集団への意識が高まり、仲間への社会的相互交渉が増加し、援助的な行動が誘発されたと考えられる。

オ．要求・自己主張：期の特徴として、要求や提案が一度で受け止めてもらえない

場合に諦めずに「交渉」としてやりとりを展開する姿が見られた。

大人側のかかわりとしては、意図的な反応をしっかりと返すことによって、対象児自身の言動、サインが反応される「効力性への動機」が高まっていることが確認された。特に、母親の変化から、ムーブメントによる遊び体験が母親へ与える影響として、1.子どもが遊ぶ姿から子どもの特徴や発達について気づきをつかむ、2.他者と子どもの関係から親が子にかかわるための手がかりを得る、3.親自身が遊び体験を共有することを通して自身の気持ち子ども重なり、子どもの気持ちや表現の理解が深まる、といった効果が考察された。

(3) 発達障害児のエンパワメントを支えるムーブメント教育・療法の有効性とプログラムの提示

本研究では、発達障害児をもつ親の幸福感を支える具体的なツールの開発を目指し、幸福感を確認できるアセスメント項目の抽出を試みたが、具体的な評価尺度の完成には至らなかった。しかし、母親の幸福感に着目した分析を行うことで、発達障害児の「エンパワメント」を支えるムーブメント教育の特長について新たな知見を得ることができた。さらに、発達障害児支援の今日的課題と照らし合わせることで、発達障害児支援におけるムーブメント教育の有効性について、「身体性」、「発達性」、「環境性」、「関係性」、「遊び性」の5つの視点から論じることができた。また、それらに基づき、発達障害児の「他者とかかわる喜び」を支え、「自分と他者を大事に思う心」を支えるための具体的なムーブメントプログラムを提示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

大橋さつき：The Effectiveness of Movement Education in Supporting Children with Developmental Disorders, 和光大学現代人間学部紀要 (7), (2014), 157-176, 査読無.

〔学会発表〕(計4件)

大橋さつき：「創造的身体表現遊び」における自閉症スペクトラム児のコミュニケーション支援 - 母子関係の変化に着目して -, 第65回舞踊学会, (20131207), 愛知芸術文化センター.

大橋さつき・杉本貴代・小林芳文：集団遊び活動における自閉症スペクトラム児の他者関係 - 親子ムーブメント教室の実践から -, 日本特殊教育学会第51回大会 (20130831), 明星大学.

大橋さつき：発達障害児をもつ母親の幸福感

を支える遊び活動の特徴 - ムーブメント教育による集団遊びの実践をもとに -, 日本発達障害学会第48回研究大会, (20130825), 早稲田大学.

大橋さつき：発達障害児をもつ親の幸福感を支える創造的身体表現遊び - 親子ムーブメント教室の実践をもとに -, 第64回舞踊学会, (20121201), 東京大学.

〔図書〕(計1件)

小林芳文・大橋さつき・飯村敦子他：「発達障害児の育成・支援とムーブメント教育」, 大修館書店, (印刷中).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大橋 さつき (OHASHI, Satsuki)
和光大学 現代人間学部 准教授
研究者番号：60313392